

## ◎特集二 グローバルヒストリーと中世ヨーロッパ(2) ドイツ語圏の視点◎

### 序

小澤 実

『史苑』前号では、イギリスにおける中世グローバルヒストリーの紹介にとめた。しかしジェレミー・エイデルマンも述べるように、グローバルヒストリーと総称されるナラティブは、必ずしも単一の起源を持つものではない<sup>1)</sup>。それは中世グローバルヒストリーにおいても同じである。

本特集では、ドイツ語圏で試みられている中世グローバルヒストリーの紹介を行いたい。具体的にはベルリン・フンボルト大学のミヒヤエル・ボルゴルテ教授による論考と、ウイーン科学アカデミーの若手ビザンツ学者ヨハネス・プライザー、カペラー博士の日本での報告概要である。ベルリンとウイーンは、プロイセン王国とハプスブルク帝国の首都として、いずれも近代学問とりわけ中世史の揺籃地として、二〇〇年にわたり重要な役割を果たしてきた。それぞれは別個の国家ではあるが、同じドイツ語を共有する空

間として緊密に連携を取る領域もあった。近代における中世史料編纂の模範の一つである「ドイツ中世史料研究所」(Monumenta Germaniae Historica)は、現在の本部はミュンヘンに置かれるものの、ドイツとオーストリアの主要都市の学術組織が共同して作業を進めている。実際に、ドイツ、オーストリア、そしてスイスで学位を取得した研究者は、それら三国の間を条件に従って移動し、学位取得国とは別の国でポストを得ることがしばしばある。ドイツ語圏は、このような言語を共通とする学問共和国を形成する一方で、歴史過程、国家制度、宗教文化などの差異が各国の学術風土に少なからぬ違いをもたらし、本特集では、このような点を念頭に置き、ドイツとオーストリアを代表する中世グローバルヒストリーの紹介にとめたい。

一九四八年生まれのミヒヤエル・ボルゴルテ教授は、カ

ロリング期における外交使節に関する研究で博士号を取得したのち、一九九一年以降、長年にわたってベルリン・フンボルト大学で中世史講座の教授職をつとめた。もともと中世の宗教組織に対する寄進行為を専門としていたボルゴルテ教授は、一九九八年にフンボルト大学内に「ヨーロッパ比較中世史研究所」を創設し、ドイツ学術会議による「ヨーロッパ中世における統合と解体」(Integration und Desintegration im europäischen Mittelalter; 2005-12)<sup>1)</sup>、そしてヨーロッパ研究会議による「中世社会における寄進団体：諸文化の比較」(Foundations in Medieval Societies, Cross-Cultural Comparisons; 2012-17) という巨大資金を得て、ベルリン・フンボルト大学を中世比較研究の拠点とした<sup>2)</sup>。中世における比較史の重要性は、ボルゴルテ教授も述べるように、一九二四年にマルク・ブロックがオスロで主張して以来、学者間で共有されてきた問題意識であるものの、ブロックの意図に沿った、もしくはブロックの意図を超えた具体的な比較研究は十分に行われてこなかったように思われる<sup>3)</sup>。ボルゴルテ教授はそのような現状を鑑み、比較史としてグローバルヒストリーという観点から、膨大な量の単著・論文・共編著を生み出してきた<sup>4)</sup>。間違いなく、ゲルト・アルトホフ、ヨハネス・フリート、オットー・ゲアハルト・エクスレらと並び、ここ数十

年の新しい社会論的傾向を持つドイツ中世史を代表する研究者である。

今回はそのようなボルゴルテ教授のグローバルヒストリー研究を反映する二本の論考を訳出している。報告一は「ヨーロッパの一神教と中世における文化の一体性の問題」<sup>5)</sup>である。本稿は二〇〇四年一〇月一〇日に、東京大学駒場キャンパスで開催されたヨーロッパ中世史・国際シンポジウム「新しい中世像を求めて 西洋文化における他者の生成」<sup>6)</sup>において口頭報告された原稿である。ジャック・ル・ゴフやミヒヤエル・ミッテラウアーのようにキリスト教に西洋中世世界のアイデンティティを求めがちな中世史研究に対して、地理的ヨーロッパで展開される宗教世界は、決してキリスト教に限定されるわけではなく三つの一神教が重層することを主張し、さらに一神教に対する本質主義的な理解に対しても厳しく批判する。宗教は超歴史的な存在ではなく、それ自身が時代や地域によって変化する歴史的存在であり、そうした歴史性を理解した上で、宗教のあり方にヨーロッパの特性を見出そうとする論考である。報告二は「中世ヨーロッパ史とグローバル・ヒストリー―諸々の経験と展望」<sup>7)</sup>である。二〇一五年一月五日にパリのドイツ歴史研究所で行われた講演原稿は、今ある姿のヨーロッパという終着点に向かって目的論的に構築された西洋中

世論に対する批判という形をとりながら、ボルゴルテ教授自身の中世論、すなわちヨーロッパという枠組みを所与の存在としない、グローバルヒストリーとしての中世ヨーロッパ史を提示する。実際にボルゴルテ教授は、盛期中世のヨーロッパ史概説『ヨーロッパがその多様性を発見する一〇五〇―一二五〇』(二〇〇二)、三つの一神教の交錯のなかで生成される中世を通覧する『キリスト教徒、ユダヤ教徒、イスラーム教徒…古代の遺産と西洋の勃興 三〇〇―一四〇〇』(二〇〇六)、古代世界から神(々々)に対する寄進という行為を通じて世界が構築されてきたことを描き出す『寄進団体の歴史としての世界史 紀元前三〇〇〇―一五〇〇』(二〇一八)と、対象とする時代と地域を広げながら、グローバルな観点で総合された概説を次々に世に問うている。本人の談によれば、次年度中に中世グローバルヒストリーの通史も刊行されることである。

なぜ原文刊行に一年の差のある二つの原稿を掲載するに至ったのか。紆余曲折があつて塩漬けとなつていた一本目の原稿を掲載するために訳者の井上がボルゴルテ教授に連絡をとつたところ、「一本目はすでに内容が古くなつていたので、新しいパリの原稿を紹介してほしい」と希望を述べられた。とはいえ、すでに説明したように両者の内容には大きな差があり、現在の日本の西洋中世研究の現状を

鑑みるに、一本目といえども必ずしも古びた内容とはいえない。また中世グローバルヒストリーの生みの親であるボルゴルテ教授の関心の変化を紹介するには両方を示す必要があると考え、ご本人の了解をとつた(実はもう一本ボルゴルテ教授の関心の広がりを示す論考があるのだが別の機会に紹介したい)。二つの論考に見える中世像の差は熟読していただくとして、一読して明確な違いが一つある。それは「グローバルヒストリー」というタームを用いているか否かである。一本目の原稿が提出された二〇〇四年時点において、ドイツにおいても確かにグローバルヒストリーという言葉が未知であつたわけではない。しかし、そのグローバルヒストリーの手法に最も近い位置にいた一人であるボルゴルテ教授は、それに相応しい内容を持つている論考であるにも関わらず、その言い方を採用しなかつた。しかし二〇一五年では、積極的にグローバルヒストリーという言葉を採用している。この点、ボルゴルテ教授に問ひ合わせると、彼自身が英語圏に起源を持つグローバルヒストリー(Globalgeschichte)という言葉の回しを論考のタイトルとして採用したのは、二〇一二年の論考が最初であるという。この一〇年間の間に、ボルゴルテ教授個人もしくはドイツの中世史学界において、グローバルヒストリーという言葉に対する態度の変化が生じていたことを想起さ

せる。

他方、小澤と諫早による報告三「ウィーン発の中世グローバルヒストリー…ヨハネス・プライザーIIカペラー博士連続講演会」では、二〇一九年一月に来日した、オーストリア科学アカデミーのヨハネス・プライザーIIカペラー博士とエカテリーニ・ミツイウ博士夫妻による日本での講演のうち、とりわけ中世グローバルヒストリーに大きく関わる前者の報告概要を記録する。彼の学術活動とそのグローバルヒストリーの特徴に関しては講演内容を読んでいただくとして、ここでは同じドイツ語圏であるために確かに共通の研究基盤を持つといえども、ドイツとオーストリアでは中世グローバルヒストリーの受容／生成の経路が異なることを強調しておきたい。

最後の小澤による報告四「中世グローバルヒストリーの潮流」では、一見すると共通の基盤を持つように見える世界各地で展開される中世グローバルヒストリーを、国境単位・言語単位の特徴を持つヒストリオグラフィの産物として概観する。グローバルヒストリーは言わずもがなの近代史の産物であり、中世以前の時代に関しては、さほど検討されてこなかった。前号と今号の特集はその空隙を埋めるための具体的な紹介でもあるが、本報告では、そもそもにおいてグローバル性を備えている古代と近代に挟

まれた中世という時代でグローバルヒストリーを考えると  
はどういうことであるのかを、英語圏、ドイツ語圏、フランス、日本の事例を辿りながら考えるための材料としたい。

- (1) ジェレミー・エイデルマン「ローヌ・ヒストリー（この大河の道 新しき世界史）羽田正編」ローヌ・ヒストリーの挑戦』山川出版社、二〇一七年、一四―三四頁。
- (2) ネネバの総括「レバ」 Michael Borgolte, Julia Dücker, Marcel Müller, und Bernd Schneidmüller, *Integration und Desintegration der Kulturen in europäischen Mittelalter*, Berlin, Walter de Gruyter, 2011; Michael Borgolte (Hrsg.), *Enzyklopädie des Stiftungswesens in mittelalterlichen Gesellschaften*, 3 vols., Berlin, Walter de Gruyter, 2014-18; Michael Borgolte, *World History as the History of Foundations 3000 BCE to 1500 CE*, Leiden, Brill, 2020. 後者の評語「レバ」 Michael Borgolte, “Foundations in medieval societies: Cross-cultural comparisons. A project of the European Research Council at the Humboldt University of Berlin”, *Journal of Transcultural Medieval Studies*, 1 (2014), p. 161–166; Rupert Graf Strachwitz, “Foundations in medieval societies. Bemerkungen zu einem Projekt über das mittelalterliche Jahrtausend aus der Sicht aktuellen Stiftungsgeschehens”, *Zeitschrift für Geschichtswissenschaft*, 65 (2017), pp. 256–269; Susanne Härtel, “Foundations in Medieval Societies. Cross-Cultural Comparisons. Possibilities and Challenges of a Long-Term Interdisciplinary Project”, *Journal of Transcultural Medieval Studies*, 5 (2018), pp. 193-202.
- (3) マルク・ブロック『比較史の方法』講談社学術文庫、二〇一八年。
- (4) ネネバの近年の考え方は Michael Borgolte, “Crisis of the Middle Ages? Deconstructing and constructing European identities in a globalized world”, in: Graham A. Loud and Martial Staub (eds.), *The Making of Medieval History*, Woodbridge, Boydell & Brewer, 2017, pp. 70-84.
- (5) エンシ語版はサンタ・マリア・ソレルナで刊行された「フロン・ソレルナ」の記念論文集に掲載された「Michael Borgolte, “Der europäische Monotheismus und das Problem kultureller Einheit im Mittelalter”, in *Ortazi proslago. Sbornik pamiatí A. Ja. Gurevicha*, Sankt-Petersburg, 2011, S. 605-27.
- (6) Michael Borgolte, “Europäische und globale Geschichte: Erfahrungen und Perspektiven”, *Francia*, 43 (2016), S. 285-302.
- (7) Michael Borgolte, *Europa entdeckt seine Vielfalt 1050–1250* (Handbuch der Geschichte Europas. Bd. 3), Stuttgart, 2002; Ders., *Christen, Juden, Musلمانen. Die Erben der Antike und der Aufstieg des Abendlandes 300 bis 1400 n. Chr.* (Siedler Geschichte Europas. Bd. 2), Siedler, München, 2006; Ders., *Weltgeschichte als Stiftungsgeschichte von 3000 v.u.Z. bis 1500 u.Z.*, Berlin, WBG Academic, 2018.
- (8) Michael Borgolte, “Mittelalter in der größeren Welt. Eine europäische Kultur in globalhistorischer Perspektive”, *Historische Zeitschrift*, 295 (2012), S. 35–61; なおネネバの教授が過去二〇年の間に「ローヌ

序（小澤）

な視点で執筆した論考は次の論文集にまとめられている。

Michael Borgolte, *Mittelalter in der größeren Welt. Essays zur Geschichtsschreibung und Beiträge zur Forschung*, Berlin, Walter de Gruyter, 2014.

本特集は、日本学術振興会科研費基盤研究A「前近代海域ヨーロッパ史の構築…河川・島嶼・海域ネットワークと政治権力の生成と展開」(課題番号 19H00546・代表：小澤 実)の成果の一部である。

(本学文学部教授)